私の草野球史

札幌市医師会
桑園整形外科
本間（ほんま）　信吾（しんご）

私は戦争直後の昭和21年生まれである。戦後っ子と言われ続け、小学校の時には自分より年上の人は少なく、周りには同年代や年下の子供たちでいっぱいだった。娯楽は少なく、遊びといえば三角ベースでの野球しかなかった。ボールは手製、バットは木の枝であった。

小学生の高学年になると体が少し大きく、走ることや投げることは得意であったため、野球では４番でピッチャーであり、喧嘩が強く、今では死語になったいわゆるガキ大将でもあった。そのころの時代のヒーローといえば映画界では石原裕次郎、野球では絶対長嶋茂雄であった。長嶋の野球姿はまぶしく映り、その打撃フォームを鏡で見ながら何度も素振ぶりを行ったものである。中学生になるとすぐに野球部に入り２年生でエースとなり、地区大会で優勝も勝ち取って、将来は野球で飯を食っていけるかなと淡い考えを持っていた。しかし中学からは全く背が伸びなくなり、中学３年になるとエースの座も奪われ、地区大会で敗退し、これで将来野球での生活をあきらめた。高校では野球部の勧誘を断り、その後一切野球は行わなかった。大学に入り寮生活の一部で草野球を楽しむ機会があった程度である。

大学を卒業し北大整形外科に入局してから、私の野球に対する考えが大きく変わった。とにかく医局では医局対抗野球に熱心であり、多くの看護婦さんが黄色い声を上げ応援してくれるし、時の教授も必ず試合を見に来るほどの野球好きであった。入局した当時はベテランの医師がそろそろ衰え始め、世代交代の時期でもあった。最初の医局対抗試合で大活躍し、その後30年間、２番ショートの座を確定した。私の入局後も野球部出身の医師が整形外科に入り、私を除くレギュラーすべての選手が野球部出身で占められた時期もあった。野球ができなければ北大整形に入局できずといわれた頃であった。

昭和54年（私の卒業後８年）、第１回日本整形外科学会野球大会が開かれ、決勝は後楽園球場で行われ、見事北大が優勝。時の主将は私であり、選手宣誓、優勝カップを授与されたことは懐かしい思い出である。また医局対抗野球も北大整形外科が７連覇という時代もあった。

野球部出身の医師たちは卒業後数年活躍するが、美味しいもの食べるため体重が増え、また研修のため地方への生活が余儀なくされるためか、野球に対する情熱が失われていく。私といえば研修病院が小樽市立病院、美唄労災病院と野球が盛んな病院への出張であり、継続して活躍の場が与えられた。

昭和56年、市立札幌病院に就職。ここでも野球が盛んであり、野球三昧の生活を送る。土、日は野球の試合、週３日は練習の生活であった。目標であった市立病院道南ブロック大会では５年連続優勝したこともある。

野球を長くやっているといろいろなことがある。40歳ころ札幌野球連盟より国体出場のため連盟のチームに参加してくれという勧誘。また私の患者が主審を務めたことがあり、私がバッターの時、２ストライク後のど真ん中のストライクをボールと判定し、相手のバッテリーが苦笑したこと。

60歳ころ守備につくとき私より若い審判が、「頑張ってください、すごいですね」と言ってくれたことなどなど。そのころ当時札幌医大整形外科野球部のＯ先生に誘われ、朝野球チームにも参加し、札幌医大整形外科のOBの皆さんと一緒にプレーを楽しんだ。市立病院、北大整形と３チームに所属し、しかも年長者の特権で憧れの長嶋選手の３塁を守った。

63歳、市立札幌病院を退職、現在の桑園整形外科に勤務。さらにＭ整形外科記念病院院長Ｓ先生より脊椎専門外来の依頼を受け、同時にＭ病院整形外科野球部へ参加を勧誘された。試合では必ず先発で２塁手９番打者として１回の打席の機会を与えられた。数年後大病を患い、野球する機会が失われたが、野球の情熱だけは失われず、大病後北大整形外科の野球部に復帰した。しかし一度失った筋力の回復はなく、ほとんどベンチウォーマー。試合中40歳も違う監督の前でダッシュや、素振りをして「自分は元気だ」などをアピール。また四球やデッドボールを狙うため左バッターに転向した。バッティングセンターではデッドボールをとるための練習もしてみたが、出場機会はほとんどなく、とうとう70歳で現役を引退した。でもいつか野球ができる日が来るという信念で75歳の今でも家でバットを振り続けている。